



報告会の開催

去る3月31日、「WHO標準経穴部位報告会」が、東京・お茶の水女子大学において開催された。事前に全国の鍼灸学校長及び学科長等に対して参加を呼びかけ、大学及び専門学校全82校中59校（72%）、盲学校及び視力障害センター全70校中31校（44%）から参加の申し込みがあり、当日は200名を超える参加者となった。とくに、大学や専門学校の72%から参加が得られたことは、関心の高さを物語るものである。

報告会の次第

報告会は、5つのセッションに分けて行われた。第1セッションは形井秀一委員長により、第一次経穴委員会の活動と1989年のジュネーブ合意までの経緯、さらに、2003年のWPROの呼びかけから第二次日本経穴委員会の発足及び今回の合意に至るまでの経過について説明された。第2セッションは、坂口俊二委員から、経穴部位標準化作業において依拠すべき文献や根拠、体表の解剖学的な指標（ランドマーク）などについて説明が行われた。第3セッションは、河原保裕委員から、奇穴から正穴に追加された7穴、骨度の変更に伴って取穴位置が変更された17穴、経穴名称の変更された3穴について報告

された。第4セッションは、浦山久嗣委員から従来の別説として紹介された取穴法が正式に採用された4穴、基準となる穴の位置変更による4穴、個別の理由により変更された36穴、取穴法の2案併記となった6穴について報告された。

最後に第5セッションとして、形井委員長より、フューチャープランの説明が行われた。

いろんなことが1991年に決まっていた！

最初に行われた報告の中で、1989年までに、1. 基本用語、2. 十二正経の英語名称、表記法、3. 八奇経脈の英語名称、表記法、4. 経穴（正穴）数；361穴、表記法、5. 奇穴47穴とその名称、表記法、6. 頭鍼の基準線（14本）の位置と名称、7. 鍼具の部位の名称、英語表記、8. 古代九鍼の名称と英語表記、9. 現代四鍼の名称と英語表記、10. 骨度分寸、手指同身寸などについてすでに定められており、第二次日本経穴委員会が、今回の日中韓・3カ国との会議において決めたのではないことが報告された。

したがって、奇穴として日本で教育されてきた7穴はすでにこの時点で正穴に組み込まれており、足の腎経の大鐘、照海、水泉の部分の順序、腹部脾経の正中線の外方4寸説、前腕1尺2寸説についても、すでに決定済みの内容であったということである。さらに、奇経八脈、九

鍼、毫鍼の各部の名称、奇穴の英語標記に至るまで決定されていた。

活発なディスカッション

説明の後には、厳しい質問が相次いだ。さすが経穴学の専門家集団！と感嘆することしきりであった。東京都立文教育学校の青木隆明先生から出た質問の中には、経渠が「手関節掌側横紋の上1寸、桡骨茎状突起と桡骨動脈の間」というのでは、非常に曖昧な内容ではないかという指摘があった。さらに、「迎」あるいは「衝」の字のつく経穴は、血管と関連が深いことから、血管を避けるという説明は納得しがたいとの意見も出された。また、明治東洋医学院の松岡憲二先生からは、腹部脾経の外方4寸説は、胸部ならいざ知らず、腹部では3.5寸説の方が実態に合っているのではないかといった指摘も、もっともな意見であると思われた。

いつも歯切れの良い応答をする浦山先生がトーンダウンしたのも頷ける内容であったと思われる。ところで、こんなことを言っただけでは響きものであるかも知れないが、第二次日本経穴委員会のメンバーが今回の決定に無条件で賛成しているわけではない。天府、侠白の上腕二頭筋外側説（腋窩横紋前端と尺沢を結ぶ外側上腕二頭筋溝にそった線の上1/3）など、とても納得できるものではないと筆者は考えている。このような経穴は少なくない。しかし、形井委員長が説明したように、ベストな選択といえるかどうかは別として、グローバルスタンダード（国際標準）を決定することに主眼が置かれていたため、合意された経穴が多いことにも、ご理解いただきたいと思う。そのうえで、今後は、種々のデータや臨床知見、実験観察等を通して、学問的に中国や韓国、ひいては世界を相手に経穴部位のより正確な位置決定のための議論が始ま

るものと思われる。今回の決定は、そのための前段階であると考えている。

フューチャープランについて

最後に、今後のフューチャープランについて形井委員長より説明が行われた。その中で、代表的な事項を示すと、計画案ではあるが、2007年夏以降に英語のWHO公式本の出版ならびに、日本語翻訳本の出版、2008年春には『標準経穴学、部位篇（仮称）』の出版を行って、各経穴部位に対してどのような検討が行われたのかについて詳しくまとめることが報告された。

そして、もっとも参加者が興味を持ったであろう教科書や国家試験については、2007年夏から秋にかけて出版される日本語翻訳本をベースとして、学校協会及び理教連で教科書の編纂が行われ、スムーズに行って2009年春から導入、2012年から国家試験にも導入（第20回）したい…という委員会の希望であることが報告された。

なお、経穴学の教科書作成については、それぞれの団体で行われるものであるが、要望があれば第二次日本経穴委員会としても協力することが改めて表明された。ただし、ここで提示された内容は予測や希望であり、確定したものでないことはいうまでもないことである。

結びにかえて

今回は、多くの示唆に富む意見、激励、中にはお叱りのコメントも戴いた。しかし、鍼灸を取り巻く現状も、世界の潮流の中で動き始めた感がある。そのためには、まず、統一基準があることが前提である。今後、本当に正しいツボはどこなのか…といった議論が、あちこちで真剣に交わされることを望んで止まない。

【第二次日本経穴委員会URL <http://point.umin.jp>】